

初任者研修「社会奉仕体験」より ～ 陸前高田市内でのボランティア活動を通して学んだこと～

7月27日(金)の初任者研修は、陸前高田市内でボランティア活動に取り組みました。復興元年となる本年度に採用された先生方には、将来の岩手を担う人材づくりである復興教育に主体的に取り組んでほしいと思っています。そのために、陸前高田市内での活動から学んだことを、各学校の実態に合わせつつ、今後の指導に生かしてほしいと考えています。

《 ボランティア活動の感想から 》

陸前高田市ボランティアセンターでの依頼を受けて、午前11時から午後2時まで、**広田地区**において**石浜海岸の清掃活動**に取り組みました。砂浜に埋もれている生活用品や漁具等を回収・撤去する作業でした。以下に初任者の感想を紹介します。

- ◆ 砂浜から箸やペンといった生活用品が出てきたことに驚きました。目に見えなくても、まだまだ多くのものが見つからないことを改めて知りました。
- ◆ 広田湾に流れ着いた漂流物(特に小石や木くず)をバケツに回収する作業でした。最後はみんなで声をかけ合いながら、埋まっている遺留品を掘り出しました。ボランティア活動を通じて、一体感が生まれたことや、海岸をきれいにできたことに、とても達成感を感じました。
- ◆ 小石拾いのボランティアは果てのない作業のように感じましたが、このような一人一人の小さな積み重ねが復興につながっていくと感じました。教員として未来の社会の担い手である子どもを育み、自立させていきたいです。



《 高田小学校を訪問した感想から 》

ボランティア活動後、陸前高田市立高田小学校の木下邦男校長先生から被災当時の様子やその後の子どもの様子について貴重なお話をいただきました。以下は初任者の感想です。



- ◆ 「親や兄弟、友達を亡くした子どもたちにどんな表情で接したらよいのか、どんな言葉がけをすればよいのか…」教職員が一番それを考えたそうです。しかし、ありのままを受け止め、共感し、子どものそばに寄り添ったという話を聞いて涙が出そうになりました。教師は子どもをどんな状況でも普段通りに受け止めることが大事だと感じました。
- ◆ 被災当初の避難の様子やマスコミ対応、児童一人一人への細やかな配慮の様子をお聞きし、復興に向けた学校の存在意義を改めて考える機会となりました。「学校は地域のシンボルである」との言葉に、身が引き締まる思いがしました。
- ◆ 子どもたちが学校行事に一生懸命取り組んだという話を聞きました。仮設住宅などいつもと同じ生活ができない中で、毎年やってきた行事ができるというのは子どもたちの支えとなったのだと思います。普通の授業をいつも通りに行うことが、何よりも子どもの安心につながっているのだとわかり、改めて学校の力を感じました。

ボランティアセンターから活動場所までの移動中、陸前高田市教育委員会の熊谷健司指導主事から、市内の復興状況や子どもたちの様子について話を聞きました。広田地区を中心とする統合3中の建設計画について、広田湾を見下ろすアップルロードの中腹に「日本一の学校を作ります。」と力強く話していました。